

江古田小校長室便り 「温故創新」

H30(2018)・0308 NO106

校長 伊波喜一

降り積もる 雪に思いを 託しつつ 薄倅の人 歌に願いを

もう一遍が「つもった雪」です。何一つ難しい言葉を使わず、ひらかなまじりに書かれた詩です。言うまでもなく、雪の役目は降り続けることです。空から舞ってくる雪に目を向けるものはいても、地べたの雪に気を留めるものはいません。誰も気にも留めない、むしろ邪魔者扱いされかねない雪に光を当てるみすゞ。まるで、雪の思いを汲み取ろうとしているかのようです。自身の主観を決して押しつけることなく、ただただ雪の気持ちに思いを寄せる。この共感力に心惹かれるのは、なぜでしょうか。

つもった雪

上の雪 さむかろな

つめたい月が さしていて

下の雪 重かろうな

何百人も のせていて

中の雪 さみしかろうな

空も地面（じべた）も みえないで